

ラフカディオ・ハーンの世界理解：中国人の宗教信仰を中心に

郭， 瀟穎
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/4752549>

出版情報：地球社会統合科学. 28 (2), pp.1-15, 2022-01-31. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：(c) 2022 Guo Xiaoying



ラフカディオ・ハーンの中国理解——中国人の宗教信仰を中心に

Lafcadio Hearn's Understanding of China

--Focusing on Chinese religious beliefs

郭瀟穎
Guo Xiaoying

要旨

Lafcadio Hearn (1850-1904, Koizumi Yakumo) was a well-known Japanese cultural researcher and folklore scholar in the Meiji era, as well as an outstanding writer. At present, the research on Hearn basically focuses on exploring his views on Japan, ghost stories, and literary theories. He is generally evaluated as a "Western introducer and disseminator of Japanese culture" or a "Western cultural critique who loves Japan". This paper explores Hearn's view of China focusing on Chinese religious belief by exploring the editorials and his letters to friends, combined with the "Social Evolutionism" which popular in American society at that time. In the end, in the European and the American era, he was a communicator of oriental culture adhering to the values of Western-centrism. Through this research, it is the conclusion that the character image of "Western critics who love Japanese culture" proposed in previous studies should be rethink.

キーワード：ラフカディオ・ハーン、宗教信仰、霊魂観、社会進化論、西洋中心主義

はじめに

ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲 (Lafcadio Hearn, 1850～1904) は明治時代の日本研究者や民俗学者として知られており、また著名な作家として『日本瞥見記』(1894)、『日本——一つの解明』(1904)、『怪談』(1904)などの文学作品を残している。ギリシャ¹に生まれたハーンは、アイルランドに育ち、幼いころはフランスで学び、そして19歳のときにヨーロッパからアメリカに渡った。20年に及ぶアメリカ生活でさまざまな職業を体験したあと、1890年に日本に到着し、その人生最後の14年をその地で過ごした。さまざまな国を行き、かつ西洋と東方にまたがるハーンの人生は、その執筆活動や文学創作に大きな影響をもたらした。なお、現在の研究においては、かようなハーンの居住地に応じて、54年にわたるその人生はつぎのように、およそ三つの時代に分けられている。

- ① 1850年～1869年 ヨーロッパ時代 19年間
- ② 1869年～1890年 アメリカ時代 21年間
- ③ 1890年～1904年 日本時代 14年間

上記のように、三つの時代はほぼ似たような比重を持つことから、ラフカディオ・ハーンの人生はつねに「漂泊の人生」(太田1994:23)と形容され、かつ「西洋人として東洋と西洋を隔てる溝を埋める」(太田1994:3)人物として高く評価されている。それぞれの国における独特な体験にもとづき、数多くの異国情緒に溢れる作品を書きのこしたハーンは、中国に滞在したことこそないが、中国古来の伝説の怪異美に魅せられて、東洋に対する夢と憧れを描いたエキゾチックな作品集『中国怪談集』(1886)をものしたほか、中国をテーマにいくつかの論説を執筆していた。このようなハーンについて、朱光潜はかつてつぎのように述べている。

希腊人的鋭敏的審美力，拉丁人的強烈的感觀欲，愛爾蘭人的詭譎的癖性，東方民族的迷離夢幻的直覺，四者熔鑄於一爐，其結果乃有小泉八雲的天才和魔力。(朱2012:122)

(ギリシャ人の鋭敏な審美力、ラテン人の情熱あふれる感性、アイルランド人のユーモアかつ狡猾な性癖、東洋民族のミステリックな直感力、これらが一つに溶け合わさり、小泉八雲の天才と魔力をつくりあげたのである。(拙訳))

¹ 生まれた当時は英領イオニア群島に属していたレフカダであった。

ハーンの人物像を鋭く見抜いた評価だといえようが、その天才と魔力は怪談文学の創作にぞんぶんに発揮されている。だが、東洋に対するハーンの関心は古い怪異文学の領域にとどまらなかった。とくに、そのアメリカ時代において、ハーンは1874年からジャーナリストとして東洋の宗教、民族、考古学や政治等に強い関心を示している。例えば、『タイムズ・デモクラット』紙で掲載された「中国の神話と崇拜」(1885)という長編記事では、中国の「天子」や「元宵節」などの政治制度、民間崇拜及び民俗に言及した。同紙1885年12月6日に掲載された「中国からの考古学的なニュース」(1885)にもハーンは山西省で古いローマの貨幣が発見されたニュースを紹介した。さらに、アメリカ時代にハーンは西インド諸島に行ったことがあり、『仏領西インド諸島の二年間』(*Two Years in the French West Indies*, 1890, Harper & brothers)を執筆し、西インドの風土人情を詳細に紹介している。小説だけではなく、ノンフィクションにおいても東洋に関心を寄せ、社会問題に対する鋭敏な洞察力を示した。

このようなハーンの執筆生涯に対して、従来の研究で多く語られてきたのは日本についての見解や怪奇文学や文芸理論などの問題であり、日本ではハーンの怪談を中心として研究が進む中で、ハーンの日本理解はよく提起されるテーマの一つである。中国における研究では、ハーン文学の女性像や再話文学の分析が最も重視されている。欧米の研究は、ハーンの日本研究者という身分に注目するが、それも概ね人物伝記を中心に据える。またハーンの人物像をめぐっても、日本文化の紹介者としてのイメージが強調されている。たとえば、田部隆次(ラフカディオ・ハーンの教え子：筆者注)の手になる伝記『小泉八雲』(1934、第一書房)に、坪内逍遙は「故小泉八雲氏の著作につきて」という序文を寄せたが、そのなかで、ハーンは「我が特殊な風俗の紹介者、解釈者」(田部1950：1)であったとその功績を讃えている。さらに、序文の最後において、坪内はハーンを「西洋最近文明の利己的、功利的、機械的、繁文縟礼の所謂物質文明の大圧迫に堪えずして暫し東洋に隠れ家を求めた最も多感な、最も多想像なファン・ド・シェークルの一天才」(田部1950：1)であったと高く評している。太田氏はまたハーンを紹介する時、「親日家として強烈な印象を与えたのが、ラフカディオ・ハーンだった」(太田1994：7)という見解を示している。

一方、「生まれ育った『西洋』ではつねに周縁者であり異端者である」(林1998)ハーンの「西洋嫌い」の気質もよく言及されている。例えば、西(1993)は「ハーンは西洋嫌い、非西洋的なものに囲まれてやっと自分を取り戻すというような資質の持ち主」(西1993)であると評価している。具体的に言えば、福澤(2005)によるハーンの西洋嫌いに至る過程は、ハーンの成長につながるものと客観的な時代状況と二つの方面に分けられている。それは西洋における生活は「個人的なレベルでは想像を絶する極めて悲惨な状況」(福澤2005)に陥ったことと、客観的な状況の「すさまじい利己主義世界が形成され、人々の間に著しい貧富・階級差が生じ、悲惨な生活が強いられた時代」(福澤2005)状況である。これに関連して、ハーンは「強烈な劣等感が彼を白人社会から遠ざけ、西洋至上主義に捕らわれない自由な視野と繊細な感受性」(高瀬2007)があるとも評価されている。産業主義、物質主義、功利主義などが溢れる西洋社会から日本へ行き、「西洋風」を嫌悪する態度や「西洋よりも日本、この世よりも夢の世が好き」(小泉1992：57)などの小泉節に語られるに見える言葉も、常に西洋嫌悪の論拠とされている。さらに、福間(2002)は『西洋を嫌い、日本を愛した西洋人作家』——ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲に対する今日の一般的なイメージは、概ねこのようなものだろう」(福間2002)とまとめているが、つまり、西洋を嫌い、日本を愛した西洋人作家という人物像は、一般的に認識されているラフカディオ・ハーンのイメージだと言えよう。

だが、ハーンの創作人生をふりかえてみると、日本に関する文章を執筆する前に、すでに中国に関する音楽に対する興味を示し、またハーンの著作の中で例を挙げると、アメリカに滞在していた時期に中国古典文学に取材した『中国怪談集』が出版され、ニューオーリンズ時代に発表した各論集において、中国に関するものは日本を論じるものよりずっと多かったことから見ても、日本と比べて中国への関心は早い時期から始まったことがわかる。つまり、一貫した東洋への関心のなかでも、ハーンはじつは日本よりも先に、中国に関心を示し、かつ中国文化や当時中国の置かれていた国際状況により興味を示していたとうかがわれる。しかしながら、ハーンが執筆した一連の中国論説はあまり注目されていないのが現状である。一度も中国に行ったことがない作家として、なぜ中国へ注目するのか、どのような立場で中国を見るのか、ハーン文学における中国や中国人はどのようなイメージであるのかといった問題はいまだに解明されていない。したがって、以上の問題意識と研究現状にもとづき、ハーンの「東洋への関心」をより細かく分析する必要があると考えている。中国との出会い、中国に対する認識を検討し、中国人の宗教信仰を中心に従来の研究史とやや異なった視点からハーンの人物像を再検討してみたい。

一、ラフカディオ・ハーンと中国の出会い

ヨーロッパ時代におけるハーンの中国への第一印象はどこから獲得されたのかを見てみよう。

1894年8月21日付チェンバレン宛の書簡は、ヨーロッパ在住時期の思い出に触れており、初めて中国との出会いが記録された。

退職の印度士官を大勢見ることが出来ました——そしてそのある者共は私に奇妙な話を聞かせてくれました。(中略) カーナーボンで私は始めて極東のことを知ったのです。一年私は乳母と二人つきり、航海者の田舎別邸で暮らしました——その男は中国への航海を遣つていました。で、帰つて来る度毎に支那からいろんな珍らしい品物を——磁器、奇怪な彫刻、神仏を——持つて帰りました。そんな品物が殆ど天井に届くほど大きな戸棚に積んでありました。私はそれをおそろしい念をして見上げて、夜はその夢を見るのです。²(斎藤正二等訳1988:342)

書簡の中で言及したカーナーボン (Caernarfon) は英国ウェールズ北西部の港湾都市である。1850年代、カーナーボンの商人は中国との航海貿易で中国の磁器、彫刻と神仏を持ち帰った。カーナーボンで定住したことは記していないが、乳母と二人で暮らしていた生活は、1851年アイルランドに帰ってから12歳でフランスの学校に行く前のことであり、特に1854年ハーンが4歳の頃母親はギリシャに戻った後のことであると推定される。ハーンは幼い頃にすでに中国との出会いを果たしていた。

これはハーンの中国への第一印象であり、中国から戻った航海者のところで、様々な珍しい中国の物を初めて見た。その「奇怪な彫刻、神仏」に「おそろしい念」を生じたハーンは、六歳の時に異界、霊界とも出会った。ハーンの幼年期に関する思い出の作品『私の守護天使——幼年期の思い出』(1999、日本図書センター)によると、ハーンは自分に霊的体験があったことを信じていた。「六歳の時、大量なお化けや悪霊のことを知るようになった」(池田訳1999:32)と記しているが、このような異世界の経験がハーンの文学趣味に影響を及ぼした。また、大叔母のところで厳しい宗教的鍛錬を受けただけでなく、夜には、「子ども部屋」と呼ばれる部屋に入れられ、鍵もかけられた。そこで眠る時、「いつも頭から毛布をかぶって眠ったが、それはお化けや悪霊に、見つからないようにするためだった」(池田訳1999:33)と述べたこともある。当時のハーンは毎夜耐えられないほどの恐怖を味わっていたのである。

このように、異界、霊界などの別の世界を信ずる者として、ハーンは神仏にも「畏ろしい」念を持った。夜の暗黒の恐怖や闇の世界の思考は、ハーンの神々の世界への直感的洞察力を開眼させた。以上のような霊的体験や夜への恐怖などは、ハーンの異世界への想像力を喚起した。その後、書物で中国を理解しようとした時期に、まず宗教に着目し、『詩経』や「中国人の神信仰」(1886)、中国の宗教の輪廻転生に関する『中国怪談集』(*Some Chinese Ghost*, 1887, Roberts Brothers)を執筆したが、中国人の世界へ足を踏み入れるきっかけの一つとなったのであろう。

以上取り上げた内容から見れば、極東への好奇心も異界、宗教への探求心も、幼い頃の体験にもとづいていることが、紙面から浮かび上がってくる。ヨーロッパ時代に中国との偶然的な出会いを果たしたことで、中国はハーンの生涯における一大テーマとなり、『中国怪談集』がハーンの文学者としての出発点になったと言えるかもしれない。

二、中国理解に向かう道——音楽から宗教へ

1869年、十九歳の春にハーンはロンドンからニューヨーク行きの移民船に乗ってアメリカへ渡った。その後、青年時代からおよそ二十年間、ハーンはアメリカ各地を転々とし、どん底の生活を体験し、種々の職業に従事した。この1869年から1890年までアメリカに滞在した二十一年の間に、ハーンは論説「中国人の神信仰」(1886年12月26日『タイムズ・デモクラット』紙原載)と「中国の将来」(1887年4月3日『タイムズ・デモクラット』紙原載)を発表し、かつ『中国怪談集』(*Some Chinese Ghost*, 1887, Roberts Brothers)をも出版した。幼少のヨーロッパ時代に比べ、中国に対する認識がさらに深まり、また前述したように、日本よりも中国に関する文章を多くものしている。この時期におけるハーンと中国人の出会いを手がかりに、ハーンの中国に対する認識はいかにして培われたのかを検討してみたい。

アメリカに着いたばかりのハーンは生計を立てることも難しかった。ニューヨークからシンシナティに移ってから、幸い、印刷屋を営むヘンリー・ワトキンと出会い、仕事を教わった。ワトキンはハーンにとって父のような存在であり、

² 下線は引用者による。以下同じ。

一生の友にまでなった。また、シンシナティにいた間に、ハーンは仕事の関係でクレービエル(H.E.Krehbiet, 1854-1923)とも親友になった。³クレービエルは音楽評論家であり、当時は各国の歌と楽器に関心を寄せていた。そのおかげで、ハーンはクレービエルと一緒にある楽器を売る中国人のところへ出かけ、はじめて中国人と知り合ったのである。シンシナティで記者として働いていた期間は1874年から1877年、ニューオーリンズに行く前までなので、ハーンと中国人との邂逅は1874年から1877年の間であると推定される。その際、中国人との出会いについて、ハーンはほぼ十年後の1887年に出版した『中国怪談集』の序文において、以下のように記している。⁴

WHO, SPEAKING THE SPEECH OF MELODY UNTO THE
CHILDREN OF TIAN-XIA,--
UNTO THE WANDERING QING-REN, WHOSE SKINS
HAVE THE COLOR OF GOLD,--
MOVED THEM TO MAKE STRANGE SOUNDS UPON THE
SERPENT-BELLIED SAN-XIAN;
PERSUADED THEM TO PLAY FOR ME UPON THE
SHRIEKING YA-XIAN;
PREVAILED ON THEM TO SING ME A SONG OF THEIR
NATIVE LAND,--
THE SONG OF MOLI HUA,
THE SONG OF THE JASMINE-FLOWER (Lafcadio 2011:6)

(金色の膚もつ天子の子、
漂泊の清人に音曲を談じて感動させ、
蛇を胴に張った不思議な音をだす三絃をひかせ、
わがために顫え泣く月琴を弾じて
ふるさとの素馨の花の歌をうたわせてくれた(平井訳1976:241))

中国音楽に魅せられ、心震えたハーンは、この序文で当日のことをリアルに描写している。清人は黄金の肌をもち、三人は愉快地話し合っていた。「三絃」を使って世にも珍しい音調を演奏してもらったが、優美な音調に興をそそられたハーンはクレービエルとその中国人に願い、月琴も弾いてもらった。二人はこの中国人から、中国の民謡の中で特に広く流布し愛唱されている「茉莉花」(ジャスミンの花)を歌ってもらった。これはハーンの人生で、はじめて中国人と接し、知り合った場面である。

また、この序文においてもうひとつ注意すべき点がある。それは、ハーンができるだけ中国語発音を用いようとする点である。たとえば、天下は「TIAN-XIA」として書き、楽器の「SAN-XIAN」も中国語音のままで書かれており、「茉莉花」(ジャスミンの花)を「MOLI-HUA」と中国人の発音をそのまま記している。このような書き方から、中国に親しみを覚えるハーンの姿がありありと目に浮かぶ。中国語の発音をそのまま用いて、異国風の言葉で表現したことから、エキゾチックな雰囲気醸し出し、アメリカの読者たちに中国の魅力を伝えたい姿勢も見られる。ヨーロッパ時代の中国の磁器や彫刻などの物から一歩進み、中国本土の音楽や楽器へと、ハーンの中国世界に対する興味はさらに深まっていった。

ハーンは、その後も中国人と中国の物に対する興味を持続する。1877年クレービエルへの書簡では中国の「月のような形で黄色い」⁵ (Elizabeth Bisland 1906:171) 銅鑼を見たことと記述している。さらに1879年クレービエルへある中国の料理店をすすめ、中国の料理について「非常に美味しい」⁶ (Elizabeth Bisland 1906:203) とも言及した。1883年の書簡で、

³ アメリカでの生活は『世界の中のラフカディオ・ハーン』(平川祐弘、1994年、河出書房新社)、2頁-4頁参照。

⁴ 中国人との出会いについては *The Life and Letters of Lafcadio Hearn* (Elizabeth Bisland, 1906, Houghton Mifflin and company) p27参照。

⁵ 前後の原文は以下の通り。“Did you ever hear a real Chinese gong... One of those great moon-disks.”

⁶ 原文は以下の通り。“I must tell you about a Chinese restaurant which I used to patronize... The cooking is perfection.”

ハーンはまた近代文明に汚染されていない東洋人への興味を表している。「印度水夫や支那の植民のうちにその本国の東洋人を求め、見慣れた欧州の移住者達の特性に有史以前の人を私は求めているのです。」(Elizabeth Bisland 1906: 291)⁷ また、1884年にニューオーリンズで万国博覧会が行われたが、ハーンはその会場で中国の農業の本や農産物を見た。それによって、ハーンは「博覧会における東洋文献」という記事を書き、中国の『農業百科全書』を紹介している。

ニューオーリンズ時代から、ハーンは初めて書簡で中国に関する書籍の読書体験を語り始めた。1884年3月、本を通して東洋に近づこうとするハーンは所蔵書籍について次のように記述している。「文庫には五百巻近くの本があります。——エジプト、アッシリア、インディア、支那、日本、アフリカ等々の書物です。」(Elizabeth Bisland 1906: 314)⁸ クレービエルへの書簡でも蔵書資料の中に中国の本があり、『東方聖書』(1823～1900、*The Sacred Books of the East*) とローウェルの『極東の魂』(1886、*Soul of the Far East*) を読んだと明記している。

後述するが、『東方聖書』には『詩経』の英訳が含まれており、ハーンはこの本から『詩経』の内容と中国人の神信仰について理解し始めたと考えられる。以上の書簡の内容から、ハーンはこのような東洋を論じる本を大量に手に入れる姿勢がみられ、東洋を理解したい心が窺える。

このように、ハーンのヨーロッパ時代における中国との出会いは偶然であったと言えようが、アメリカ時代のハーンは、中国に深い興味をもちはじめ、能動的に「中国」(中国の音楽、中国の書籍など) をもとめ始めたことがわかる。物から人、視覚から聴覚さらに味覚、書物も大事に扱うというかたちで、ハーンは一步一步未知の世界——彼にとって魅力的な中国——へ足を踏み入れたのである。

『ラフカディオ・ハーン著作集』の「『東洋論集』解説」で、高木大幹氏はハーンを次のように評価している。

ハーンがアメリカで苦学力行している間、彼の眼は早くも、東洋・中近東に向けられていて、その知識の摂取消化はすさまじいものがあつた。既に新聞記者となっていたハーンは着眼がよく、文藻は豊かで、書きに書いた。(中略) 独学による知識の蓄積は益々増大し激流となって奔騰し、その博識多才は人々をして瞠若たらしめた。そのスケールの広大なるは無論のこと、人間の生のきびしさ、はかなさは彼の心眼に狂いなく映じ、歴史の悲歌哀愁のすすりなきに耳を傾けて、皆、生きた材料として綴られていった。(高木1981: 168)

アメリカでジャーナリストとして働いていた間、才能あふれるハーンの視線は早くも中国へ向けられていた。『東方聖書』やローウェルの『極東の魂』などを読んだこと、万国博覧会での見物などもきっかけになったと考えられ、絶えず中国へまなざしを注ぎ、「中国の神信仰」、「中国の将来」で中国を論じるだけでなく、『中国怪談集』をも執筆した。そんななかで、中国の音楽から宗教へ、理解を深めようとしたハーンは、1886年にはじめて中国について論説を書くことになる。

三、中国人の信仰について——唯一神への信仰

ハーンの中国に関する初めての論説である「中国人の神信仰」は、1886年12月26日に『タイムズ・デモクラット』紙(*Times Democrat*)に掲載された文章である。注目に値するのは、アメリカ時代のハーンは早いうちに中国人の信仰に関心を持つことである。ハーンはこの文章の中に、魂の不死と先祖崇拝について論じるとともに、中国の宗教、古典に関する知識も読者たちに伝えた。その中で次のように述べている。(著作集でハーンが引用している『詩経』の英語原文及び翻訳された日本語が併記されているため、以下著作集に従って引用する。また、本文では対照のため、『詩経』中国語原文も挙げる。)

ハーンが引用している『詩経』の部分は次のように書かれている。

Wen-Wang now dwelleth in the upper spaces:

Oh! how great is his glory in heaven!

Whether he riseth(to the highest of the celestial spheres) or whether he descendeth(to the regions of earth),—

He remaineth ever at the right and at the left of the Sovereign Lord.

⁷ 原文は以下の通り。"I am seeking the Orient at home, among our Lascar and Chinese colonies, and the Prehistoric in the characteristics of strange European settlers."

⁸ 原文は以下の通り。"I have now nearly five hundred volumes--Egyptian, Assyrian, Indian, Chinese, Japanese, African, etc."

文王はいま上なる大空にいます。
 おお、彼の栄光の天に何と大いなることか！
 はたまた、(地のおちこちに) 降るとも
 彼はいつも至高の主の右におり、左にいます。

——『詩経』第三部オード第一

この神への信仰のシンプルな表明は、等しい強い、魂の不死への信仰の主張と対になっているのが見られよう。(斎藤等訳1988: 269)

(『詩経』原文は次のように記している。

文王在上，於昭於天。周雖旧邦，其命維新。有周不顯，帝命不時。文王陟降，在帝左右。

——『詩経』大雅・文王)

ハーンは『詩経』の内容を引用し、魂の不死に対する中国人の信仰を西洋人に伝えた。ここでまずハーンはどのような経緯で『詩経』に触れたのかを考察してみる。『富山大学ヘルン文庫所蔵小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)関係文献目録：改訂版：第2次補遺版』によると、ハーンの所蔵書籍では、*The Sacred books of China: the texts of confucianism (The Shù king (Classic of History). The religions portions of the Shih king (Classic of Poetry). The Hsiào king (Xiao Jīng) (1879, Clarendon Press)* という本がある。これは宣教師ジェームズ・レグによる翻訳『東方聖典叢書 (Secret book of the East)』のうちの一卷である。この本には『書経』、『詩経』と『孝経』の英訳を含んでいるので、ハーンはこの本によって『詩経』の具体的な内容を知ったと推定される。

ハーンの蔵書資料で、中国に関するもう一冊の本として『中国総論』(*The middle Kingdom = 中国総論: a survey of the geography, government, literature, social life, arts, and history of the Chinese Empire and its inhabitants*, 1904, Charles Scribner's Sons) がある。題目に示されるように、著者のウェルス・ウィリアムはこの分厚い本において中国の歴史、法律、教育、言語、文学、食物、社会生活から行政区画、各省の自然状況や山川草木にいたるまで詳しく記述している。その中で、第十一章「中国古典文学」では『易経』、『書経』、『礼記』、『春秋』、『論語』とともに、『詩経』(THE SHI KING, OR BOOK OF ODES) が以下のように紹介されている。

The third of the classics, the Shi King, or 'Book of odes,' is ranked together with the two preceding, while its influence upon the national mind has been equally great; a list of commentators upon this work fills the third section of the Catalogue…… In the preface to his careful translation Dr. Legge has collected all the important information concerning the age, origin, and purpose of these odes, as furnished by native commentators, whose theory is that "it was the duty of the kings to make themselves acquainted with all the odes and songs current in the different States, and to judge from them of the character of the rule exercised by their several princes, so that they might minister praise or blame, reward or punishment accordingly." (Williams 1904: 636 – 637)

((紹介したい) 第三部古典文学の『詩経』は前章で紹介した二部と並び、国民思想への影響も極めて大きい。『詩経』の評論家のリストは目次が示しているように、(本章の) 第三部分で書く…丁寧な翻訳の序文で、レグ博士はすべての重要な情報を収集し、年齢や起源、これら詩歌の目的について、ネイティブの評論家のように詳しく記述している。「各地のすべての詩歌に親しくなり、そこから各地の諸侯によって執行されている規則の性質を判断し、それぞれの賞賛やめ誹責、賞罰を決めることは王の責任である」と彼は主張する。(拙訳))

この紹介文では、『詩経』が中国の国民思想に与えた影響を提示している。ハーンが『詩経』からの詩句を論拠とし、中国人の国民的な信仰への影響を論じたこととある程度重なっている。

さて、ハーンが引用している詩における「天」と「帝」の翻訳とハーンの解釈から見れば、ハーンの認識では、中国人は一体無神論者なのか、多神論者なのか、唯一神の信仰を有するのかを確認していこう。

Heaven (tien), who placed upon the throne the virtuous ancestor of the dynasty of Yn,
Hath not permitted his (degenerate) descendants to keep the Empire...
Wen-Wang, who served the Sovereign Lord (Chang-ti) with a pure heart, was filled with blessings, and received
the mandate to govern the nations.

——Ode II, Part III

天は殷王朝の有徳の祖先を玉座においたが、
彼の末裔に帝国を保つことを許さなかった。
文王は、至高の主(上帝)に清い心で仕え、祝福に満たされて、諸国民統治の委任を受けた。

——第三部オード第二

(『詩経』の原文は以下のように記している。

天位殷適，使不挾四方。維此文王，小心翼翼。昭事上帝，聿懷多福。厥德不回，以受方國。

——『詩経』大雅・大明)

ここでハーンが引用している本来の英語文献における詩句では、「天」は「heaven(tien)」であり、「帝」は「Sovereign Lord(Chang-ti)」である。この「天」、「帝」や「神」などの英訳については、宗教的に大きな問題なので、宣教師の中で大論争が起こった。ここで「天」と「帝」の翻訳は相異なるものとして扱われているが、この文脈によると「天」も「帝」も同じように国の君主を指定する権力がある。ハーンは後の部分でまた次のように引用している。

Oh! How great is He! —how vast is He!—the Sovereign Lord (Chang-ti) the Master of the World!
How terrible is He!—how awful His judgments are!
Heaven (tien) created man, but not in order that man should rashly use the privilege of life.

——Ode XXI

おお、彼は何と偉大！——彼は何と広大！——至高の主(上帝)、世界の主は！
彼は何とおそろし！——彼の裁きの何とおそろし！
天は人を作った、しかしそれは人が生の特権を無謀に使うためではない。

——オード第二十一

(蕩蕩上帝，下民之辟。疾威上帝，其命多辟。天生烝民，其命匪諶。

——『詩経』大雅・蕩)

ハーンは以上の内容を引用している。このような内容から見れば、「天」も「帝」も「世界の主」であり、人を作る能力及び世界を統治する力を持っている。つまり、『詩経』のような中国古典文学から、中国人の「唯一神への信仰」を論証することになる。このことは当時の宣教師たちにとって重要な意味を有する。つまり中国人たちはキリスト教の神を容易に理解し、受容する可能性があることを示唆している。また、『詩経』の翻訳を全体的に見れば、レッグ博士も宣教という目的を達成するために、『詩経』を翻訳した時、『詩経』の三つの部分では、「雅」を中心とした傾向が見られる。

『詩経』の構成は、「風」「雅」「頌」の三つに大別される。「風」は各地の民謡で、「雅」は貴族や朝廷の公事・宴席などで演奏した音楽の歌詞であり、「頌」は朝廷の祭祀に用いた廟歌の歌詞で先祖崇拜が体现できる。従って、「雅」の部分は『詩経』では、中国人の「天」あるいは「帝」への信仰を理解することにとって最適な部分である。中国古典典籍における「天」と「帝」の統一思想に着目すれば、中国人も昔から「至高の主」への信仰があるため、その「至高の主」イコールキリスト教の「上帝」であることが導き出され、キリスト教の教義は中国人にとって受け入れやすくなる。したがって、1879年『東方聖書』版『詩経』の翻訳者レッグ博士は「序」で以下のように主張した。

The term Heaven (天, pronounced Tien) is used everywhere in the Chinese Classics for the Supreme Power, ruling and governing all the affairs of men with an omnipotent and omniscient righteous and goodness; and this vague term is constantly interchanged in the same paragraph, not to say the same sentence, with the personal names Ti and Shang Ti. (James Legge 1879 : xxvi)

(中国の典籍では、Heaven (天)は至高無上の力として広く用いられる。それは全能的で、正義を高揚し、仁愛の心で世間の一切衆生を統治する。「天」を何回も繰り返さないため、同じ文章のなかで恒常的に「帝」及び「上帝」という人格的な名前と換えられる。(拙訳))

ハーンもこの解釈をそのまま受けいれたと考えられ、「この二経(『詩経』と『書経』)は、学識ある孔子の労苦により保存され、中国人の、至高の存在者、万能の創造王、スカンジナビアの雄大な言葉を借りれば万物の父への信仰が確実に存在していたことを証言している」(斎藤等訳1988: 269)と確信し、文章の最後で「このフランス学者⁹は、中国の文学および宗教の長い進化をずっと貫いて、そして私たち自身の時代の中にまでも、唯一神への信仰のうちに、変わらない信念を跡づけることに成功している」という結論を導き出した。

ハーンが総括したように、引用されている『詩経』は、「天」も「帝」も造物主のような存在であると扱われ、「至高の存在者」という言葉で偉大な「万物の父」を形容する。ハーンはフランス学者エルヴェ・ド・サンドニ侯爵の講演を聞いてから、中国人には唯一神への信仰があることを確信していた。だが、中国人の中には道教及び仏教に信仰を有する人も多くおり、地域神の信仰と並存している。中国の神はキリスト教の唯一者、最高者、全知全能者というイメージとはほど遠く、一概に中国人に唯一神への信仰があるとは言えないと考えられる。中国人が唯一神の信仰を有することはハーンの誤認であるとも言えるかもしれない。しかしながら、中国人の信仰における唯一神の信仰があるとすれば、中国古典での「上帝」や「帝」の観念がキリスト教の上帝のイメージと重なっていると宣教師が主張した観念は、中国人に受け入れやすいと考えられる。従って、ハーンの誤認は宣教師の宣教活動と結びつけることができる。

布教活動を行ううえで、「God」の翻訳問題は重要である。その訳語として、「上帝」「(帝)」「天」や「神」などの英訳のいずれが適切であるのかは大きな問題になったのである。イギリス宣教師は「上帝」が最も良い訳語だと主張した。「神」は崇拝物を指しているから、自然界の不思議な力を持つものの類称であり、一神教の最高存在を示す言葉としては相応しくないとの理由で「上帝」を採用したのである。また、「上帝」は中国古来の存在の言葉であり、皇帝は上帝を祭る祭壇で毎年冬至の日に儀式を営んでいた。ハーンは明らかに、中国ではキリスト教の「上帝」のような最高存在があるという解釈を完全に受け入れ、さらにこの考え方を広範に広めようとしていた。

四、中国人の靈魂観——先祖崇拝

ハーンの「中国人の神信仰」は、『詩経』からの数行の詩文を取り上げた後、中国人の思想において、先祖の魂が意識ある状態で生き続けるという、魂の不死に対する信仰に言及している。

仏教のニルヴァーナ——魂の全面的な終結——という観念は、中国にはついに根づかなかった(中略)これはたいへんに面白い言明である。とくに、ド・ロニ¹⁰が、最近の日本文献に関する仕事で、日本では仏教が性格を変え、来世についての教義が詩的で感動的な表現を大いに取り込んだ宗教となった、ということを示しているのを思い合わせるときには、中国のこうした状況に対する理由は、とくに、死者を敬うのが家族の務めであるという先祖崇拝は、全面的な無化という教義とはけっして並存できなかった、ということだと思える。(斎藤等訳1988: 275)

中国では「人が二つの靈魂を持つとされる。それが魂・魄であり」、「陰陽、精神と肉体にかかわるとされる。」(池澤2003)しかし、「魂魄は固定的ではなく、成長するもの、環境によって異なるものである。」(池澤2003)その中で、陽の部分が魂、精神的な活動能力と見なされるが、体と同様に物質的なものが必要であると言われる。「もし、ある人が物質的に恵まれ、また十分に支援を受けている場合には、その魂と魄は非常に強くなり、それによって精神性や知性を生み出す。魂の基礎となるものとして、身体的栄養と家族の背景との両方が強調されている。物質的な観点だけでなく、貴族階級の身分意識もうかがえる。」(余2008)

『左伝』昭公七年でも、このような記載があり、「人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂。用物精多、則魂魄強、是以有精爽、至於神明」(杜預注、孔穎達疏: 90-92)という。物質と魂魄の関連性があると論じられ、祖先祭祀の場合、死者の救済

⁹ エルヴェ・ド・サンドニ侯爵(1822—1892)、十九世紀フランスの高名な中国学者。

¹⁰ レオン・ド・ロニー(Léon-Louis-Lucien Prunel de Rosny, 1837—1914). フランスの民俗学、言語学、日本学者。

と見なされると言えるであろう。また、「祖先」と「厲鬼」の差異が絶対的でないことは、夭折または無祀という点からも言える」(池澤2003)から、祖先への供養の必要性があると考えの方が妥当であろう。

貴族の身体的栄養と家族的背景は優越性があり、物質的な支援も多く得られる。従って、『詩経』における文王はハーンが「中国人の神信仰」で「はたまた、(地のおちこちに)降るとも 彼はいつも至高の主の右にあり、左にいます」(斎藤等訳1988:269)と述べたように、天にいるとも地に降るとも、君主である文王は、いつも「至高の主」のそばにいることが可能となる。

また、先祖の魂に物質的なものが必要だということについて、ハーンはこの書籍のみならず、『異国風物と回想』に収められた「死者の文学」の中でも言及している。位牌は「中国で『神主』という死後の名札、つまり位牌を日本へ輸入したのは儒教である」(平井訳1975:364)と記述しており、儒教の伝入とともに、日本に入つたと意識したハーンは、「位牌というものが生者と死者とを結び付けるとりわけ重要な仕掛けと映ったことには変わりがなく」(大東2001)、「死者の尊霊がそこに坐すもの」(平井訳1975:364)と、位牌の役割を解釈している。ハーンはまたアメリカ時代において、先祖の魂へ「物質的な栄養」を供えることを目にしたこともあった。1894年に掲載された論説において、ハーンは観察したことを次のように記述している。

清国人はある日、それらの死者に食べ物を供えるためにかなりの距離を——ときには数百マイルも旅行する。筆者はメキシコ湾沿岸で、料理された鶏、米、酒——つまり彼らの本来のご馳走が、清国人漁夫の墓前に供えられているのを見たことを覚えている。そして、そのあたりに人は住んでいないのだ。(斎藤等訳1988:480)

ハーンの観察した通り、古来中国人は銘板や墓を通して、子孫から先祖の魂へ「物質的な栄養」を供えている。中国では、先祖への崇拝を土台とする儒教が、既に社会の各方面に染み込んでおり、中国民衆の心をつかんできた。「孝」の思想に基づき、先祖霊に対する崇拝や祖先を祀ることは、子孫の義務だと考えられる。「宗廟祭祀の在り方に関しては、(中略)朝堂では先祖代々の位牌を昭穆の順に並べて安置し、定期的に祖霊祭祀を行うと同時に、政治や記念式典をも実施することが中心とされた。寝室には祖先の衣冠と生活用品が揃えられ、いつも新鮮な食物が供奉されており、祖霊が生前と同様な奉仕を受け続けるように配慮されているといわれる。」(黄2001) また、『論語・為政篇』において、孔子は「孝」の意味を「生事之以礼、死葬之以礼、祭之以礼」(朱熹集註1936:12)、つまり、生きる時に礼を以て仕え、死ぬ時に礼を以て葬り、礼を以て祭る、と解釈している。すなわち、先祖が死すれば祭祀することは「孝」の延長線の行為であると認識できる。現世における人間と、過去の先祖とのつながりを重視することによって、先祖崇拝及び魂の不死思想はたしかにリアルに表現された。

このような伝統思想に対して、ハーンは「中国人の神信仰」で「仏教のニルヴァーナ——魂の全面的な終結——という観念は、中国にはついで根づかなかった」(斎藤等訳1988:275)という結論にまで至るとともに、死んだ先祖は消えることはなく、中国人の先祖崇拝への否定は賢明なことではないと、西洋人が中国で行う宣教活動に対する修正の必要を提案している。『十九世紀後半の西洋人は、アジアの「近代化」とは「西洋化」であり、「キリスト教化」こそが「文明化」である、と信じていた。中には、「植民地化」することが文明の恩恵をひろめる「開化」の事業だと思っていた西洋人もいたのである。』(平川編1992:12) そのため、宣教師たちは中国に派遣され、或いは自発的に中国で宣教を行っていた時、キリスト教の優越性を信じ込んでいた。当時中国人の信仰、中国における先祖崇拝の意味を正確に把握する人は極めて少なかったが、例外的にハーンは、中国の宗教の独特なところに着目し先祖崇拝を重視する必要性を西洋に発信した。「中国人の神信仰」に次のような言及がある。

中国人の宗教において、祖先崇拝と犠牲の儀式、そして雑多な迷信的習慣の遵守、これらは中国人のほぼ唯物論的な生活一般とまったくちぐはぐである。(斎藤等訳1988:268)

無神論に基づいた唯物論思想の下で生活しているように見える中国人の生活は、キリスト教徒のように礼拝する習慣もなく、ほかの特殊な儀式もないが、先祖崇拝は無視できない宗教儀式である。「死者を敬うのが家族の務めであるという先祖崇拝は中国の宗教ではまことに深い基盤となっている」(斎藤等訳1988:275) というように、祭祖の際、親族が集まることによって、家族団結の機能も果たす。しかしながら、次々と中国を訪れたキリスト教宣教師たちは、布教活動において先祖崇拝の靈魂観や中国の慣習伝統を無視し、キリスト教の典礼を中国人に広めようとした。さらに、宣教師

は中国人の先祖をそしることもあったのである。ハーンも「反外国か、反宣教師か？」(1895年8月16日、『神戸クロニクル』原載)の中で一例を挙げながら、宣教師たちのやり方に対し次のように評論している。

彼らの教義が清国人の慣行を破壊するものと見なされたのである。(中略) 思い起こされねばならないのは、多くの宣教師たちは、布教という困難な問題を処理するにあたって、ほとんどなんの気配りも働かせていないことである。(中略) ある宣教師が一人の清国人に、昔のキリスト教主教がリバルド王に語ったとされているのとちょうど同じように、この清国人の先祖たちは地獄にいと語った。(真貝義五郎訳1994：129)

死を生と同じように重要視した中国人にとって、先祖を尊敬することは、すでに心の奥に定着した考え方である。従って、中国において、祖先崇拜を無視したキリスト教に対する排斥がやまず、仇教運動となって、宣教師や信者に対する殺傷事件や、教会の焼打ちなどが相次いだ。

このような状況下、ハーンは「イエズス会宣教師はそれ(先祖崇拜)に対抗するのは賢明でない」(斎藤等訳1988：275)と、宣教師の活動方針を修正する意見を提出した。また、「清国における反宣教師暴動」(1895年8月13日、『神戸クロニクル』原載)において、ハーンは中国での布教活動を調整すべきであることを明瞭に提案している。

多くの外国人宣教師殺害にまで至った清国における最近の諸暴動は、ただ単に諸外国政府による騒動原因の徹底的な調査を必要としているように思えるだけではなく、われわれがかねて注意を喚起していた事実——つまり、攻撃対象としてただ宣教師のみが選び出されているということ——は、彼ら宣教師の布教活動のやり方にもなんらかの調査が必要であることを示唆している。(真貝義五郎訳1994：123)

実際、ハーンは一貫して宣教師たちの活動へ関心を寄せ続けていた。1895年8月16日に掲載された「反外国か、反宣教師か？」の一文では、中国における、外国人宣教師に対する反発の感情や、乱暴行為について記述し、中国に適した措置を講じていた。

われわれが提案したいのは、次のことである。つまり、このようにひきつづき起こる乱暴行為に直面しては、宣教師団体は、この帝国が外国人交易者の存在に慣れ、外国交際の有益性を実感するまでは、その活動者たちを呼び戻すべきである、ということである。(真貝義五郎訳1994：131)

宣教師たちが中国で行った布教活動は、積極的な側面があるということは確かである。客観的に見れば、宣教師は異文化交流の担い手として活躍し、それにより東西文化の交渉、伝播、融合がある程度実現した。しかしながら、宣教活動は西洋各国の勢力拡大競争の一環と捉えることもできる。宣教活動を支援しつづけた国々は、単に宣教を求めだけでなく、思想上の侵略等、政治上の目的もあったことは事実である。また、列強諸国は中国と一連の不平等条約¹¹を締結したうえで、外国人宣教師の治外法権を守ることも実現させていた。一方、宣教師はアヘン貿易を支持し、不平等条約の交渉にも介入した¹²。さらに、彼らはまたその語学力を利用して、情報収集や帝国主義各国の中国進出にも貢献した。エドワード・サイードは布教活動について、このように評価している。「伝道事業が政治や権力の世俗的束縛を逃れて、独立した文化的状況のなかで行われたとは到底考えられない」(エドワード・サイード1998：120－122)。征服者と被征服者との対立の構図で、西洋諸国は軍事的な行動をすると同時に、情報収集も思想のコントロールも行っていた。従って、1860年代以降、中国における反キリスト教運動が頻発し、多数の中国人は、宣教師たちを侵略者と同様に見なしていた。ハーンはこのような状況について「清国の騒乱」一篇で次のように評論している。「最近、英語圏世界を震え上が

¹¹ 例えば、南京条約で外国の領事裁判権が認められたこと。天津条約に、アヘン貿易の合法化が含まれること。清仏北京条約で外国人宣教師の内地伝道権、保護享有権及び不動産取得権が明記されたことなど。

¹² 例えば、入華宣教師ウィリアムズの日記で「アヘン貿易はようやく合法化した」と支持の態度を明確に記している。(Frederick Wells Williams, The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL.D.: Missionary, Diplomatist, Sinologue, New York: G.P.Putnam's sons, 1889, p.292参照) ハーンはこのウィリアムズの態度を理解していたかどうか確定できないが、ウィリアムズ執筆の『中国総論』を引用文献として多く使っている。また、『中国近代史三』(復旦大学歴史系編著、野原四郎等監訳、1981年、三省堂)によると、「帝国主義の侵略の尖兵として、宣教師は帝国主義諸国のそれぞれの侵略上の配置に応じて協力し……たとえば、イギリスのT・リチャード、アメリカのG・リード……など、宗教の外衣をまといながら、その犯罪行為のまぎれもないこれらの侵略者は、不平等条約の調印を強制し、直接中国の内政に干渉して……」とある。

らせたあのような行為（仇教運動）を犯した幾人かの悪人を処刑することも（中略）不法行為を行っている町々を砲艦で砲撃することも、これらすべての手段は、清帝国の他の地方で同じような事件が再発するのを避けることにも、外国伝道者たちに投げつけられている憎悪を減らすことにも、いずれにも無効である……（中略）キリスト教伝道は軍事的強制をもって清国の人々に押しつけられてきた。しかし伝道活動の場合は、結果への配慮を犯罪的に無視してなされたのであり、その無視が今復讐を求めているのである。（真貝義五郎訳1994：159）

ハーンは西洋諸国が「軍事的強制」という方法で宗教を中国人に押しつけていたことを明確に理解した上で、列強に対して自分の意見を表明した。当時のハーンには、宣教のために提案したというよりはむしろ西洋中心の考えから論じる意向が読み取れよう。

以上述べてきたように、ハーンが中国を論じる時、まず注目したのは、中国人の宗教信仰であった。また、「中国人の先祖崇拜」という靈魂観についても西洋の読者に説明し、より正しい中国文化を伝えようとする姿勢がみられる。しかしながら、ハーンはそこに留まることはなかった。中国人の宗教信仰を紹介することからもう一歩進み、宣教師たちに中国人の信仰を尊重すべきだという活動方針を提案することにより、ハーンの西洋中心主義の思考様式がみられる。

五、ラフカディオ・ハーンの世界理解——社会進化論

1887年4月3日付の『タイムズ・デモクラット』紙に、ハーンの「中国の将来」という論説が掲載された。「中国の非常に大きい活力の問題と、西洋諸民族に対してその力の絶えず増大している脅威について」（森亮訳1981：82）書かれた文章である。以上の冒頭部分の記述には、西洋に対する中国の脅威が明らかに吐露されている。

中国は何世紀も前に世界の市場への侵略を始めている。無論、中国の過剰人口は、まず南部と東部に突如爆発した。しかし黄色中国人の洪水は十三世紀、マルコ・ポーロの時代にボルネオに達していたのである。（森亮訳1981：82）

ハーンはまず中国からの移住者を黄色の洪水だと比喻し、異人種競争の問題を提起し、それは「二十世紀に『適者生存』によって結局は決定される一層恐ろしい様相を呈する争闘なのである」（森亮訳1981：82）と述べている。次に中国人が各地で大虐殺されることと、太平天国の乱や飢饉、洪水および疾病により何百万人が落命したのに、なお何億人もいると記述したあとで、中国人の繁殖能力は異常に高いと西洋人へ警告を発した。また、1881年と1887年という二つの時点において、西洋に滞在する中国人の具体的な人数をあげて比較し、「白人の労働を不可能にしてしまう」（森亮訳1981：83）という懸念を示し、白人による渡来を阻止措置にもかかわらず、中国人の渡来者数が増え続けたことを証明する。また、中国人の生活コストのことも含めて考えた上で、白色人種が将来「知的と物的の覇権と優位が保証できるであろうか」という懸念を表明した。最後は中国人がヨーロッパを征服する危険の分析で文章を締め括っている。

「中国の将来」の内容は当時の世論に呼応するものと思われる。ハーンは黄色人種が大量に欧米に流れ込むのを目撃した。「中国の労働者は、一日に八セントから十セントで食べていけるし、もっと少なくとも生きてはいける」と嘆き、中国人が「ヨーロッパ人種の十分の一の生活費でやっていける一アジア民族」であり、また「その人口は四億九〇〇万を数える！」と強調している。「そこに危険があるのだ。この危険は差し迫っている——じわじわとだが確実に、黙黙として穏やかに中国がヨーロッパを征服する危険なのだ」と欧米社会に注意を強く呼びかけている。

また、ハーンは書簡のなかで、繰り返しスペンサーの作品を友達に推薦している。ハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820－1903）は、イギリスの哲学者、社会学者、倫理学者であり、社会進化論の提唱者である。1887年4月に、ゲールド宛の書簡では、ハーンは自分の進化論者という立場について以下のように明白に述べている。

私は進化論者である。スペンサーの信奉者である。¹³（Elizabeth 1906：394）

社会進化論とは、数世紀にわたって、西洋における中国像が構成される際に依拠された基盤理論の一つである。「スペンサーは人類の進化は多様性への発展であり、それが多数の人種の成立にも反映されていて、人種の中でより『低い』人種は動物により近い」（マイケル・シーゲル2007）と論じた。人種間の進化による差を具体的に言えば、「進化がより進んでいる『人種』と進化がより遅れている『人種』があり、進化がより進んでいる人種は生き残り、より遅れている人種は絶

¹³ 原文は以下の通り。「MR. GOULD 1887.4. I am an Evolutionist, a disciple of Spencer」.

滅、すなわち彼の造語『適者生存』(マイケル・シーゲル2007)に至る。それとダーウィンの思想との関連性により、科学が大変信頼されていた時代において、その「科学的な」イメージは相当な説得力を有するものとなった。ハーンは社会進化論を信じ、人種には区別があり、進化の程度も違い、東洋人と西洋人の知的能力も違うと主張していた。

1891年5月に、チェンバレン宛の書簡では、ハーンはまた以下のような問題を憂慮している。「民族の運命に関しては、われわれのあえて推測し得ない多くの問題が未来に横たわっています。しかし、東洋がいまに西洋を支配し、ついにはこれを完全に吸収してしまうであろうという信念は、根拠のないものではありません。」(1891年5月、チェンバレン宛、斎藤等訳1988:343)すなわち、東洋の脅威を唱えはじめたのである。1893年4月28日チェンバレン宛の書簡において、スペンサーの忠実な追随者であるハーンはまた社会進化論の思想を明確に表した。

われわれの種族の攻撃力は、われわれが劣等だの野蛮だのと呼んでいる国民によって、最も簡単に模倣され、獲得されてしまうものなのです。(1893年4月28日付、チェンバレン宛、斎藤等訳1988:567-568)

ここで、ハーンは東洋人を「われわれが劣等だの野蛮だのと呼んでいる国民」だと述べるが、それは東洋人が進化のより遅れた「劣等な野蛮人」であるという彼の認識を示している。その野蛮さと劣性を強調する内容は明らかにスペンサーの社会進化理論を踏襲したものであり、ハーンは何度も自分の進化論信奉者の身分を明白に認めている。

さらに、この書簡では、「適者生存」の問題を取り上げ、「東洋に比べて、より大きな頭脳を有し、神経的にもより複雑な西洋の諸民族は、ついには東洋の諸民族にその席をゆずり、取って代わられねばならない」(1893年4月28日付、チェンバレン宛、斎藤等訳1988:568)と書かれ、東洋人への懸念と軽蔑する気持ちが読み取られる。なぜ西洋人の攻撃力は「われわれが劣等だの野蛮だのと呼んでいる国民によって、最も簡単に模倣され、獲得されてしまう」(1893年4月28日付、チェンバレン宛、斎藤等訳1988:567-568)のか、なぜ西洋は東洋に席を譲るのかというと、そのことについてハーンはチェンバレン宛の書簡でこのように解釈している。

中国人は白人以下の生活程度で生活する能力があるので恐れられます。(中略)一方の民族は他方の民族から搾り取ることができ、その他方の民族がまた押し潰し、吸収してしまうのです。しかし、この危険を、何が防げるのでしょうか？わたくしごとく一作家の叫びが役立たないことは、確実なのです。(1893年5月2日付、チェンバレン宛、斎藤等訳1988:572)

ハーンは白人が中国人より生活コストが高いということを頻繁に提示した上で、作家としての身分で白人社会の発展に役に立とうとしている意図と限界も表している。また、「極東の将来」においても以下のように説明している。

もし中国人が西欧の産業機械や西欧の科学知識を彼らの競争に用いるとすれば、一体どうなるだろうか？それは西欧にとって由々しい事態になるだろう。西欧の通商が東洋から追放されることを意味するだろう。(中略)もし東洋がその拡張を助けるために西欧の機械を用いるならば、西欧は五十年前に夢にも思わなかったような危険に直面しなければならないだろう。(中略)

どの高級な西欧民族をとってもその生活コストは、絶対的な必需品に限って言っても、極東の民族の少なくとも四、五倍はかかっている。もし必需品だけでなく事実について言えば、私たちが考える西洋国家の生活コストは二〇倍、三〇倍、五〇倍も大きいのである。そして西欧のどの民族も、数百万の極東の人たちが生きている条件のもとでは生きてゆけないだろう。彼らは餓死するだろう。(熊本大学小泉八雲研究会編1993:293-295)

このようなハーンの論説と書簡から、ハーンがスペンサーの思想に傾倒し、社会進化論の深い信奉者であったことが明確に読み取れる。この社会進化論とは帝国主義諸国の宗教方面の中国進出に対するハーンの提言の理論基礎であった。また中国への憂慮と軽蔑はハーン自身におけるアメリカ時代から日本時代まで続いた。ここからは、個人の思想は時代と文化の偏見や制約を乗り越えることができないことが窺え、中国の読者になる時のラフカディオ・ハーンがやはり西洋という立場に立脚していたこと、いわゆる西洋中心主義の視点を有したことも無視できない。つまり社会進化論をはじめ、人種差別主義はハーン中国認識の既定の視野そのものであり、時代の制約も無視できないのである。

六、同時代の作品から見るハーンの独自性——「異教徒支那人」を例として

1862年のアメリカでは、太平洋鉄道法が制定され、大陸横断鉄道の建設が推進された。それに伴い、労働力需要が再び上昇し、中国からの労働者は更にアメリカに流れ込んだ。この移動についてハーンはどのように記している。

西洋が中国に開港を迫った後は、中国人は他の国々に行きはじめた。彼らは北アメリカや南アメリカの太平洋岸に移住しはじめた。西インド諸島にも流れこんだ。彼らはオーストラリアやジャワにも移民した。(中略) アメリカが恐怖を抱いた最初の国であった。カリフォルニアではだれも中国人と競争することができないことが分かった。彼らは商業を吸収し貿易を独占した。徐々に西部各州全てが恐怖を感じはじめた。中国人移民を止める法案が二年前に通過した。アメリカ人は商業や産業の面では中国人と競争できないことを理解した。(熊本大学小泉八雲研究会編 1993: 292)

南北戦争後の1870年代、アメリカにおける景気が悪化した為、中国人苦力の給与水準も下がった。この時、多くの中国移民の流入がアメリカ国民の反感を買うことになる。雇用された中国人労働者は白人労働者と競合関係にありながら、中国人の賃金はあまりにも低廉で、多々の雇用機会を喪失した白人労働者にとって極めて脅威的なライバルであった。白人の雇用機会をアジア移民により奪われたことに、資本家と労働者の階級的かつ経済的な利害関係の対立は「白色人種」と「黄色人種」の対立となった。このように当時、中国人への先入観や不安が社会に満ちていた。一方で、言葉の違いは言うまでもなく、中国人の宗教信仰と白人の信仰との間には根本的な相違点がある。生活習慣や宗教儀式も全く異なったため、中国人労働者は異質な集団と言われるのである¹⁴。中国人のような経済上白人に脅威を与える異質集団への排斥運動は経済的な分野で進展したことはもちろん、文学にも表れてくる。

1870年、アメリカの有名な作家、小説家であるブレット・ハート¹⁵ (1836 - 1902) の最も有名な詩の一つ、「異教徒支那人」(*THE HEATHEN CHINEE*) が1870年9月号『オーバーランド・マンズリー』(*The Overland Monthly*) に掲載された。その後、およそ十数社の大きな新聞雑誌に転載され、人気が大層高まってきた。例えば、ニューヨークイブニング、サタデーイブニングポストやボストンイブニングトランスクリプトなどの新聞社で転載され、そして、1871年にボストンの新聞に再掲載された後、またすぐにニューヨーク・イブニング・ポスト、ニューヨークなどの新聞や雑誌に再掲載された。さらに、アメリカの新聞だけではなく、イギリスの『ザ・スペクテイター』誌にも転載された¹⁶。即ち、この詩は世に出ると全米を風靡しただけでなく、西洋世界に広く知られるようになり、空前の成功を得た。ハートもこの詩によって一躍有名になり、アメリカ東部から多くの出版社が彼の新作を買い求めるようになった。

詩の題名は本来「誠実なジェームズの実話」(*Plain Language from Truthful James*) であったが、この詩の中で「異教徒支那人」という言葉が繰り返し出てくるため、この一句は人々の心に染み渡り、詩の原題に取って代わられた。内容は、アーシンという中国人がアメリカ人ジェームズたちとカードで遊ぶというものである。ジェームズはアーシンを騙すつもりだったが、ルールを知らないアーシンは騙されたふりをして結局ゲームに勝った。白人の読者たちは従来中国人が陰險で邪悪だと考えていたが、それに加えてこの詩でアーシンの狡猾で神秘的な中国人のイメージはあまりにも印象的で、この詩が発表されてから、アメリカ人の心には、中国人に対する固有のステレオタイプ認識が客観的に強化さ

¹⁴ 黄禍論の発展過程について、『黄禍論とは何か』(ハイン・ゴルヴィッツァー著、瀬野文教訳、1999年、草思社) 24 - 29頁を参照した。

¹⁵ (1836年8月25日-1902年5月5日) ニューヨーク州オールバニー生れで、新聞記者。アメリカの短編作家および詩人であり、鉱山労働者、ギャンブラー、およびその他のカリフォルニアゴールドラッシュのロマンチックな人物を描いた短編小説で最もよく記憶される。40年以上にわたるキャリアの中で、彼はフィクションに加えて詩、演劇、講義、書評、社説、雑誌のスケッチを書いた。カリフォルニアから米国東部、ヨーロッパ、ヨーロッパに移動したとき、彼は自分の物語に新しい主題とキャラクターを取り入れたが、ゴールドラッシュの物語は最も頻繁に再版され、改作され、賞賛された。「異教徒支那人」が1871年にボストンの新聞に再掲載された後、またすぐにニューヨーク・イブニング・ポスト、ニューヨークを含む他の新聞や雑誌に転載された。

¹⁶ 掲載情報はFenn William Purviance, *Ah Sin and His Brethren in American Literature*, (1933, Collage of Chinese Studies) 45-47頁参照。

れ、「アーシン」と「異教徒」は中国人に対する代名詞となった。

詩名の中の「HEATHEN」の意味は「異教徒」で、「異教徒」という言葉は、『大辞林』では、「自分の信仰している宗教とは異なる宗教を信仰している人。特にキリスト教徒が他の宗教の信者をいう」とされ、本来差別や偏見のニュアンスがないはずである。しかしながら、この詩の余波で、アメリカ人は明らかに善悪の二元論のもとで「異教徒」と中国人とを緊密に結びつけ、中国文明を下等な位置に置き、軽蔑の意を表していた。中国社会の先祖崇拜とキリスト教の一神信仰との根本的な相違の上で、中国人移民の増加はアメリカ人に対して現実の脅威となっていた。ハートの詩は当時のアメリカ文明の主導と優越感を確立した情勢の下で、また東洋人労働者との競争に負けるという危機感の矛盾な状況で、アメリカ民衆の心理状態に迎合し、満足させたのだ。

「異教徒支那人」が掲載された後、ハートとアメリカ文壇の代表的な作家マーク・トウェイン（1835～1910年）との共作による「アーシン」(*Ah Sin: The Heathen Chinee*)という戯曲が発表された。この戯曲の題名の「アーシン」は、上述の「異教徒支那人」における登場人物の中国人アーシンによるものである。「異教徒支那人」のアーシンと同様、劇曲の主人公アーシンも終日無表情で何事にも無関心で、迷信と神秘的な雰囲気の中で生きている中国人「異教徒」である。彼の劇中の身分は賭博師で詐欺師、盗み屋などの不気味な存在である。

以上のような時代背景から見れば、ハーンの記事も当時の世論と同じように、進化論のもとで中国人を進化が遅れている人種と見なし、中国人の経済的な脅威を強調していた。しかしながら、同時代の作家は中国人に対し「異教徒」というレッテルを用い、中国人の性格に対する想像に基づいて頻繁に中国人を攻撃し、西洋世界は宣教師の派遣によって中国人の宗教信仰も支配しようとしていたのに対し、ハーンは中国人の信仰をより正しい方向から紹介しようとする姿勢を示し、それを尊重すべきだと主張した。この点においてハーンの独自性が見られると言えよう。

おわりに

ラフカディオ・ハーンはアメリカ時代から日本時代にかけて中国に対する関心を絶えず持ち続けていた。中国の宗教に対する理解に独特な観点があることも「中国人の神信仰」一文から垣間見ることが出来た。文学作品の作者としてだけでなく、ハーンのもう一つの顔——東洋社会の観察者としての姿がうかがえる。

そこからは、ハーンの西洋中心的思考様式を改めて指摘することができそう。西洋を離れ、東洋に近づこうとしたラフカディオ・ハーンは結局、アメリカ時代に西洋中心の価値観から脱出することができず、ハーン像を検討する際には、作家ハーンが社会進化論の時代に生きたという事実を見過ごすことはできないのであり、再検討する必要性があると考えられる。

参考文献

【日本語文献】

- 池澤 優 (2003)「中国の死生観」『死および死者崇拜・死者儀礼の宗教的意義に関する比較文化的・統合的研究』第三部、平成12～14年度科学研究費補助金(基盤研究C(1))研究成果報告書。
- エドワード・サイード(1998)『文化と帝国主義Ⅰ』(大橋洋一訳) みすず書房。
- 太田雄三(1994)『ラフカディオ・ハーン—実像と虚像—』岩波書店。
- 熊本大学小泉八雲研究会編(1993)『ラフカディオ・ハーン再考——百年後の熊本から』恒文社。
- 小泉八雲著平井呈一訳(1975)『仏の畑の落穂・他』恒文社。
- 小泉八雲著平井呈一訳(1976)『中国怪談集 他』恒文社。
- 小泉八雲著池田雅之訳(1999)『私の守護天使——幼年期の思い出』日本図書センター。
- 小泉節(1992)『思ひ出の記』小泉八雲 回想と研究(平川祐弘編) 講談社。
- 黄曉芬(2001)『魂魄説——古代中国の祖霊祭祀について——』『総合人間科学』1(1): 93-104。
- 斎藤正二等訳(1988)『ラフカディオ・ハーン著作集』(第五卷) 恒文社。
- 斎藤正二等訳(1983)『ラフカディオ・ハーン著作集』(第十四卷) 恒文社。
- 斎藤正二等訳(1988)『ラフカディオ・ハーン著作集』(第十五卷) 恒文社。
- 真貝義五郎訳(1994)『神戸クロニクル論説集 バレット文庫版』恒文社。
- 高木大幹等訳(1981)『ラフカディオ・ハーン著作集』(第三卷) 恒文社。
- 高木大幹(1981)『『東洋論集』解説』『ラフカディオ・ハーン著作集』(第三卷) 恒文社。

高瀬彰典 (2007)「小泉八雲の異文化理解」『島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)』41 : 87-103

田部隆次 (1950)『小泉八雲 ラフカディオ・ヘルン』北星堂.

富山大学附属図書館 (1999)『富山大学ヘルン文庫所蔵小泉八雲 (ラフカディオ・ハーン) 関係文献目録 : 改訂版 : 第2次補遺版』.

西 成彦 (1993)「マニラ行きの夢」熊本大学小泉八雲研究会『ラフカディオ・ハーン再考——百年後の熊本から』恒文社.

林 浩平 (1998)「萩原朔太郎とハーン ふたつの詩魂のふれあうもの」『国文学 解釈と教材の研究』43 (8) : 107.

平川祐弘編 (1992)『小泉八雲 回想と研究』講談社.

福澤 清 (2005)「没後100年 : ハーン再評価の試み」『21世紀に再考するラフカディオ・ハーン』熊本大学社会文化科学研究科.

福間良明 (2002)「ラフカディオ・ハーン研究言説における『西洋』『日本』『辺境』の表象とナショナリティ」『社会学評論』53 (3) : 329-347.

マイケル・シーゲル (2007)「人種主義と二十世紀の世界—オーストラリアの『盗まれた世代』の例—」『社会と倫理』21 : 63-76.

余英時 (2008)「中国人の生死観——儒教の伝統を中心に」(古橋紀宏、新田元規訳)『死生学研究』9 : 12-39.

【英語文献】

Elizabeth Bisland (1906) The Life and Letters of Lafcadio Hearn. Houghton Mifflin and company.

James Legge (1879) Sacred Books of the East VOL. III. Oxford University Press.

Lafcadio Hearn (2011) Some Chinese Ghost. Tuttle Publishing.

Williams, S. Wells (1904) The Middle Kingdom : a survey of the geography, government, literature, social life, arts, and history of the Chinese Empire and its inhabitants Vol.2, New York: Trow's, copyright 1882, Charles Scribner's Sons.

【中国語文献】

杜預注、孔穎達疏 (唐)『春秋左伝正義』『武英殿十三經注疏』本

朱熹集註 (1936)『論語・為政』富山房

朱熹 (1958)『詩集伝』中華書局出版社

朱光潜 (2012)「小泉八雲」『朱光潜全集 第六卷 我与文学与其他 談文学』中華書局